

(様式第2号)

研究No. (記載不要)	— —
-----------------	-----

平成 19 年度配分 研究成果発表報告書(実績)

研究名	大学生の心理的適応過程：学業への意欲と進路意識の発達に注目して				
配分を受けた 特別研究費	文化政策学部長 特別研究費				660 千円
研究者氏名 (代表者)	学部名	学科名	職	氏名	共同研究者
	文化政策	文化政策	准教授	福岡欣治	他 名
発表の方法	1 紀要 名称:			号数	第 号 (頁～ 頁) (年 月発行)
	2 学会等での発表 学会等名: 日本発達心理学会第20回大会 (ポスター発表)			発表日	平成21年3月24日
	3 その他 発表の方法:			発表日	平成 年 月 日

学会等での発表及びその他の場合は、学会報等発表を証する資料を添付すること。

配分を受けた翌年度の3月末までに提出

日本発達心理学会

第20回大会論文集

2009. 3. 23～3. 25

日本女子大学(目白キャンパス)

主催

日本女子大学 日本発達心理学会第20回大会委員会

- P5-046 青年期のぬいぐるみへの関わり方とイメージの研究 (第1報)
—現代の青年期におけるぬいぐるみへの関わり方は?—
函館大谷短期大学 寺尾 尚
- P5-047 青年後期における両親間葛藤の心理的影響(5)
—父母の家族成員への依存の構造に着目して—
立命館大学文学部 宇都宮 博
- P5-048 共感性, 社会的スキル, および精神的健康との関連
—情動的共感性の指向性の違いに注目して—
中部大学教養教育部教職課程 鈴木 育美
広島国際大学心理科学部コミュニケーション学科 木野 和代*
- P5-049 短期大学生における学習意欲、進路意識とソーシャル・サポート
静岡文化芸術大学文化政策学部 福岡 欣治
- P5-050 内的作業モデルとアタッチメント行動
—サポート認知の媒介効果の検討—
名古屋大学大学院教育発達科学研究科 島 義弘
- P5-051 対人的拒絶が関係形成行動に及ぼす影響
日本学術振興会/名古屋大学大学院教育発達科学研究科 岡田 涼
- P5-052 幼児の弁当作りに関する母親の意識
早稲田大学大学院人間科学研究科 伊東 暁子
早稲田大学人間科学学術院 鈴木 晶夫
- P5-053 子どもの幼稚園入園に対する母親の意味づけ
—入園児が第一子の母親と第二子の母親の違いに注目して—
お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 今井 麻美
- P5-054 自由記述に見る成人期の将来展望(2)
日本と中国のライフ・スクリプトの比較
駒沢女子短期大学 向田 久美子
東京大学 東 洋
- P5-055 一時的母子分離時における母親の意識
—公民館における保育利用時の意識を中心として—
県立新潟女子短期大学幼児教育学科 角張 慶子
- P5-056 乳幼児をもつ父親の育児・家事行動とウェルビーイング
西日本短期大学 田辺 昌吾
園田学園女子大学 川村 千恵子*
- P5-057 教員養成課程学生の文化的アイデンティティに関する質的研究
名古屋女子大学 内田 千春
- P5-058 祖母-母-娘三代の関係性(2)
—「母」世代が描くイメージ画を通して—
京都大学大学院教育学研究科 西山 直子

短期大学生における学習意欲、進路意識とソーシャル・サポート

福岡 欣治
(静岡文化芸術大学文化政策学部)

問題と目的

大学・短大への入学は青年にとって大きな環境の変化であり、大学生生活への適応は古くて新しい課題である。他方、昨今の就職活動の早期化とも相まって、大学生の進路意識の醸成は各大学とも大きな課題となっている。多くの大学生(短期大学生を含む)は、大学生生活を充実させつつ卒業後の進路に向けた準備をおこなっていかなくてはならない。

本研究では、短期大学1年生を対象に前期終了前の7月と後期終了時(就職活動を控えた時期)の1月下旬の2回にわたって実施した調査にもとづき、大学生の学習意欲と進路意識、およびそれらに及ぼすソーシャル・サポートとの関連性を調べた。

方法

調査方法と対象者

愛知県内の短期大学1校において、新入生を対象に7月上旬と翌年1月下旬の2回にわたり質問紙調査を実施した(授業時配布・約2週間の期限を設けて後日提出)。両時点で共通する回答者は計113名(全員女性)。年齢18-25歳(M=18.3, SD=0.76:7月調査時点)。自宅通学者77.0%。

測定内容の概要(特に記載がないものは両時点で測定)

- ①学習意欲:下山(1995)の意欲低下領域尺度。「学業」「授業」「大学生活」の3側面、各5項目。5件法(1.全くあてはまらない~5.大変あてはまる)。高得点ほど意欲が高くなるように得点化した。尺度別および合計点を算出。下位尺度間相関は0.21~0.51。
- ②知覚されたサポート:福岡(2003,2007等)をふまえて作成。父・母・同性の友人・異性の友人との現在の関係について各4項目で測定。4件法(1.そうでない~4.大いにそうである)。
- ③進路にかかわる意識:「受験時に卒業後の進路を考慮したか」「入学時に卒業後の進路について具体的なイメージを持っていたか」(以上第1回のみ)、「調査時点で卒業後の進路について具体的なイメージを持っているか」「入学時と調査時点での考え方の変化」(以上両時点)をたずねた。各1項目。
- ④進路に関わるサポート:進路選択の観点からみた「家族・親戚」「友人・知人」「学校の教職員」との関係について。「自分の進路選択に対して関心を示してくれる」など各6項目。4件法(1.そうでない~4.大いにそうである)。尺度間相関は0.53~0.61。第2回調査のみで測定。
- ④キャリア意識:坂柳(1996)のキャリア・レディネス尺度。「関心度」「自律度」「計画度」の3領域、各9項目からなる。5件法(1.まったくあてはまらない~5.よくあてはまる)。

主な結果と考察

第1回(7月)調査では、受験時に卒業後の進路を考慮していた人、調査時点の進路イメージが具体的である人ほど学習意欲が高く($r=.24 \sim .25, p<.05$)、学習意欲が高いほどキャリア意識も高かった($r=.55, p<.001$)。知覚されたサポートは父親と母親のサポートが学習意欲・キャリア意識と正の相関があった($r=.20 \sim .32, p<.05 \sim .001$)が、友人のサポートは何ら有意な相関を示さなかった。

第2回(1月)調査では、調査時点の進路イメージ・学習意欲・キャリア意識の関係は第1回調査とほぼ同様であった。知覚されたサポートでは、両親だけでなく同性友人のサポートが大学生活の意欲およびキャリア意識の「関心度」「自律度」と関連していた($r=.21 \sim .40, p<.05 \sim .001$)。さらに進路に関わるサポートはいずれもキャリア意識と強い正の相関があった($r=.45 \sim .60, p<.001$)。

なお、第1回調査のキャリア意識を統制しても、第2回調査の進路関連サポートとキャリア意識の間には、なお有意な正の相関があった($r=.27 \sim .41, p<.05 \sim .001$)。

これらの結果は、学習意欲と進路意識が入学後の早い時期から関連していること、両親のサポートも影響していること、さらに家族・友人・教職員の進路関連サポートが進路意識の発達とリンクしていることを示している。なお、上記以外の分析結果と考察は当日提示する。

調査にご協力くださった短期大学の先生方ならびに学生の皆様方に深く感謝いたします。なお、研究の遂行にあたり、平成19年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究費の助成を受けました。